

サン＝フロレ聖堂壁画様式研究 ——作者同定について——

勝谷 祐子（早稲田大学/ストラスブール大学）

フランス、オーヴェルニュ地方に位置するサン＝フロレの高台にある聖堂（13-16世紀）には、14世紀末、この地を治めた支配者ジュアン・ジュアン・ド・ベルナーヴにより一族のための埋葬用礼拝堂が増設され、北壁面には領主とその妻、子供たちの姿を玉座の聖母子にとりなす洗礼者ヨハネが表された。1914年に壁画を発見したアンリ・ド・ランケは『ブリュッセル時禱書』の聖母子像（1402年以前、ブリュッセル、ベルギー王立図書館、ms. 11060-61、p. 11）に共通する姿勢や襷の表現を見てとり、近郊に存在したベリー公ジャンの住居に施された装飾に影響を受けた注文主が、その周辺画家に作らせたものとする。ゲオルグ・トレッシャー（1966）と、アンヌ・クルティエ（1983）はこの見解を踏襲した。

ド・ランケ以降、進展のない研究の現状に対し、発表者はサン＝フロレに程近いエヌザのサン＝ヴィクトール＝エ＝サント＝クーロンヌ参事会聖堂身廊南壁に描かれた《最後の審判》（1405年、エンコースティック、2 x 4,80 m）との様式的一致を新知見として提示する。

フレデリック・エルシグ（2004）によれば、アヴィニオン派美術の潮流へと位置付けられるエヌザ壁画には14世紀末のトスカーナ州域の絵画をモデルとしたヴォリュームの表現や緑がかかった顔色、プロポーションが見られ、その洗練されたデッサンにはベリー公の画家、偽ジャックマルの影響が認められる。発表者は本壁画とサン＝フロレ壁画との比較から、同一の顔貌表現と輪郭線、空間表現を観察したうえで、共通して見られるグラフィカルな描線とアシュールの技法、異なるマチエールを描き分ける白の用法により、両作品が同じ画家の手になることを新たに指摘したい。

さらに、サン＝フロレ壁画にみる女性寄進者の身体は、量塊性が強調されるエヌザ壁画のそれに比べ、より狭い肩、細い胸部をもって表され、なだらかな曲線を表すよう、わずかに反り返る姿勢を見せている。この点に関し発表者は、南方出身の画家がこの地を訪れ、流麗な描線への意識を高めたことでランブール兄弟の絵画などに見られる北方由来の身体表現を適用するようになったと解釈する。そのためサン＝フロレ壁画の制作年代をエヌザ壁画よりも後とし、ド・ランケの提示する下限1411年を受け入れ1410年頃に位置付けたい。

本発表は、以上のようにサン＝フロレ聖堂壁画の様式を再検討し、エヌザ壁画を手掛けた画家への帰属を提示することにより、アヴィニオンもしくは北イタリアといった南方に出自を持つ画家が、ベリー公周辺の作品に影響を受けながら本作品を制作したことを明らかにするものである。この成果は、15世紀ヨーロッパの南北様式交流史においてベリーの地における美術が果たした役割を照らし出すこととなる。